

# 平和の鳩 ヴェルダ マーヨ

## —反戦に生涯を捧げたエスペランチスト長谷川テル—

中村浩平

### はじめに

日本と中国の長い友好の歴史の中で、日本が「富国強兵」をいわば国是として近代化の道を歩んだ近代という時代は、日本が中国に侵略するといった、両国にとって不幸な時期であった。日本のアジア近隣諸国への侵略行為は止まるところを知らないといっても過言ではなく、日本と中国の間にも日中戦争があり、両国の関係が最も不幸な時期であった。

しかしこのような時期にも日中の友好を願い、この暗い時代に灯りを点そうとした人たちが少なからずいた。近年日本でこれらの人々に関する記事が雑誌に記載され、また本が出版された。すなわち、「延安ローズ」こと原清子<sup>1)</sup>と韓瑞穂<sup>2)</sup>についてであるが、彼女たちは中国人の夫と中国に渡り、数奇な、波乱に富んだ人生を彼の地で送った。そして同じような経過をたどり、似たような境遇にあった女性に長谷川テル<sup>3)</sup>がいた。しかし彼女は前述の二人とは違って、人生を全うすることはなかった。

長谷川テルはかつて日本で一時期その名前が一般にもかなり知られていたが、今日ではエスペランチストの間でもそれほど知られているとは言えないであろう。しかも彼女の存在が本来知られるようになったのは、日本ではなくて中国に於ける活動によるものであった。日中戦争時代に彼女は、中国で、中国の同志とともにエスペラントによる反戦活動の一端を担い、また日本語による反戦、反軍の抗日宣伝放送を行った。そしてそのさい彼女の行動を支えたものに、エスペラントに内在する精神および「ホマラリスモ」があるように思われる。<sup>4)</sup>

エスペラントは彼女にとって一体何であったのか。また大島義夫が、「日本軍国主義がアジア大陸へ大規模な侵攻をはじめ、国の内外ともに緊迫した空気につつまれていた1937年という歴史的な時点に、日本のかよわい若い女性が、やがては敵国となる中国の青年のあとを追い、しかも戦争反対に心をもやし、売国奴の汚名をあまんじてうける覚悟をもって、単身、中国へ渡ったのは、なぜであったか？」<sup>5)</sup>と述べているように、彼女は、例えば夫が中国人であったにせよ、なぜ中国へ渡ったのであろうか。

テルは1936年秋、エスペラントを通して知り合いになった中国人留学生劉仁と父親の強い反対を押し切って結婚している。当時の日本の社会では彼女が中国人と結婚すること自体が偏見の対象となり、白眼視されるという状況下にあった。葉籟士によると、「例えば、鹿地亘のような革命家を自認していた人でさえも、この問題に関しては緑川（緑川英子＝テルの中国名）をとやかく、嘲笑していた」<sup>6)</sup>のであり、「姉のユキ（西村幸子）もやはりエスペランチストであったが、妹の思想と行動には理解をもたなかった」<sup>7)</sup>とのことである。

このように家族や周囲が挙って反対する結婚をテルが敢えてしたのはなぜなのか。しかし結婚したとは言っても、同居はしなかった。葉籟士はこの辺の事情を次のように述べている。「1936年の春頃、エスペラントの関係で、緑川は東京在住中国留学生劉仁（又の名は劉砥芳、劉鏡環）と知り合い、同年秋、家族の同意なしに劉仁との結婚を発表したが、同居はしなかった。恐らく緑川は父母の反対を察し、中国へ行くための既成事実を造る必要があったのであろう」。<sup>7)</sup>

なぜテルは既成事実まで造って、生まれ育った日本を去り、戦乱只中の中国へ旅立つ必要があったのだろうか。祖国を何らかの理由で去ることはいわば亡命である。テルは中国へ亡命したのであろうか。恐らくテルの日本脱出にはエスペランチストとしての理想を夫の国中国で是が非でも実現しようとする強い思いが込められていたのではなからうか。

小論では従って以下、長谷川テルとエスペラントの関わりを見ながら、彼女の生涯を貫いた反戦活動を亡命という視点を絡めながら捉えてみたい。

### 1. 生い立ちから自立まで

長谷川テル（本名照子）は1912年3月7日、父長谷川幸之助、母よねの次女として山梨県猿橋で生まれた。姉にユキ（幸子）、弟に弘がいた。東京で初等、中等教育を終え、いわば恵まれた家庭の子女として、1929年に奈良女子高等師範学校国文科に入学した。奈良は日本の古都であり、その静かな環境の中でテルは初めは学内の短歌サークルに属して、短歌に熱中していた。しかしテルが女高師に在学していた時代は、国の内外にいくつもの歴史的な事件が相次いで起こり、日本は、ドイツと並んで、ファシズムと戦争の道をひたすら急いでいた。激動する歴史とは無縁に過ごしていたテルも、次第に社会的な事象に関心を持つようになり、当初属していた短歌グループから離れ、1932年6月頃に同級の長戸恭<sup>9)</sup>と学内に、新劇、文学、エスペラントの愛好者を集めた、文化サークルを作った。

そしてこの頃テルは長戸恭らと奈良エスペラント会の宮武正道からエスペラントを学び始めている。また日本プロレタリア・エスペランチスト同盟京都支部と連絡を取っている。さらに文学と社会の関わりについての関心から、その頃テルは長戸恭とプロレタリア作家同盟のメンバーである大山峻峰<sup>9)</sup>と接触した。彼女たちは「左翼文化運動に参加し、奈良地方の左翼労働組合、文化団体と頻りに接触した」<sup>10)</sup>この彼女たちの行動は当時の日本では大変危険なものであった。

奈良では、彼女たちが夏休みで帰省中の8月

31日に、官憲によって「全農全会派、奈良合同労組、水平社、文化団体を中心に百三十二名が検挙され、そのうち四十二名が治安維持法違反として起訴」<sup>11)</sup>されるという大きな事件が起きた。そしてこの奈良地方の労働・農民運動の一斉弾圧・検挙に連座して、テルと長戸恭は夏休み終了後に帰省先から帰寮したとき、共に逮捕された。<sup>12)</sup>テルは取り調べ留置の後、9月19日（あるいは18日）に釈放され、長戸恭は首謀者として約3週間拘留された。長戸恭は送検され、翌33年1月起訴留保となっている。そして卒業を3ヶ月後に控えて、彼女たちは「自主退学」処分となった。テルは父親に引き取られ、東京に戻った。

東京でテルは、おそらくエスペランチストとしての将来の活動に備えて、タイプライター学校へ通い、タイプを習った。その後日本エスペラント学会で雑務を手伝ったり、無給でタイピストとして働いた。学会事務所には三宅史平がおり、さらにこの時期大島義夫や中垣虎次郎などに接触した。そしてこれら最も優れたエスペランチストの下でテルはエスペラントの力を伸ばし、エスペラントの内在思想の理解を一層深めていったと思われる。

宮本正男はこう述べている。「テルのエスペラントが進歩したのはこの時期であったと断定できよう。大島を中心に、三宅、中垣虎次郎、今日の児童文学者岡太一その他が作った日本エスペラント文芸協会でもまれたことも大きな成果であり、テルの文学活動もこの時期に始まった」<sup>13)</sup>

テルはこの時期いろいろなエスペラント活動に積極的に参加している。いくつかの左翼系のエスペラント会に出たり、日本エスペラント学会、日本エスペラント文芸協会の機関誌（『Revuo Orienta（東洋評論）』、『Esperanta Literaturo（エスペラント文学）』）およびその他のエスペラントの出版物に小説、評論、翻訳などを数多く寄稿している。<sup>14)</sup>そのテーマは、文学、演劇、婦人問題、児童問題などに関してのものであった。またKlara Rondo（「クララ会」進歩的なエスペラント婦人組織）を通して、1935年には上海世界語者協会の機関誌『La Mondo（世界）』3-4月号に「日本における女性の地位（VIRINA STATO

EN JAPANIO)」を載せている。これは編集長葉籟士の求めに応じて、国際婦人デーにあたり、世界各国婦人の社会的地位に関するこの雑誌の特集号に書いたものである。なお、これを機縁としてテルは葉籟士と文通を始めている。テルは以後もこの雑誌の求めに応じて、「日本のプロレタリア文学の現状 (NUNA STATO DE JAPANA PROLETA LITERATURO)」(1936年3-4月号)などを寄稿している。<sup>15)</sup>

ところでテルがこのようにのめり込んでいき、それからの人生の核となったエスペラントとは何なのか。次にそれに若干言及してみたい。

## 2. エスペラントとは何か―出自とその意義

エスペラントは、単的に言えば、言語の違う諸民族の相互理解を目的として、平和共存を願いポーランドのユダヤ人医師ラザロ・ザメンホフ<sup>16)</sup>によってつくられた人工言語である。しかしエスペラントは何の前触れもなく突然生まれてきたものではない。それが誕生する背景があり、それには二つのことが考えられる。一つは、国際語を求める歴史的運動であり、もう一つはエスペラントをつくったザメンホフを取り巻く歴史的・社会的状況である。

国際語については17世紀にチェコの教育思想家ヤン・アモス・コメンスキー、ドイツの哲学者・数学者ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ、フランスの哲学者ルネ・デカルトなどが関心を持っていたと言われているが、<sup>17)</sup>なかでもその必要性を最初に説いたのはデカルトであると言われている。デカルトは1629年11月20日のメルセンス司教宛の手紙の中で、国際語の必要性と、その文法は5-6時間で習得されうる合理的で、かつ平易なものでなければならぬと書いた。<sup>18)</sup>それ以後おおくの人たちが「数百」におよぶ国際語の試案を発表してきた。<sup>19)</sup>1855年フランスの哲学者シャルル・ルヌーヴィエが、それまでの国際語案の試行錯誤を踏まえて、「国際語の構成は思考の論理的分析にもとづいた哲学的なものでなければならず、その語彙は生きた諸国語からひきだされた経験的なものでなければならぬ」<sup>20)</sup>と書いた。

そしてエスペラントは言語としてこれらの哲学者のとなえた要件を完全にみたすものであった。その文法は合理的で、かつ平易であり、その構成は哲学的であり、その語彙は経験的であった。<sup>21)</sup>こうしてエスペラントは他のいくつかの国際語に比べてはるかに多くの人々に受け入れられ、コミュニケーションをはかる手段として使用され、時代を乗り越えてきたのである。<sup>22)</sup>

しかし、言語としてのエスペラントの有用性にもかかわらず、エスペラントはたんなる言語なのかという問題が存在する。すなわち、エスペラントを言語学的論理の帰結としてのみ捉えることができない理由がある。というのは、エスペラントは、「民族的にも政治的にも抑圧されていたリトアニア生まれのユダヤ人としてのザメンホフの生涯とその思想、ポーランドがおかれていた帝政ロシアの領土としての位置、ツァリーの軍隊によって鎮圧された1963年~65年のポーランドの反乱やユダヤ人大虐殺の歴史などを背景にして生まれてきたイデオロギーでもあった」<sup>23)</sup>からである。

ツァーの統治下のリトアニアでは、諸民族は分裂政策に扇動され、互いに憎しみ合い、言語、宗教、風俗、習慣などの違いや、ささいな行き違いのため激しく争っていた。ザメンホフの住んでいた小さなビャウイストクの町でもユダヤ人はアイシュ語、ポーランド人はポーランド語、ドイツ人はドイツ語、ロシア人はロシア語を話し、互いに分裂し、憎み合っていた。<sup>24)</sup>このような状況の下で若きザメンホフは言語間の差別撤廃を願い、民族的排外主義に抗議して、一つの言語による諸民族の相互理解に資するために「万国語」をつくり、さらにこれに磨きをかけて1887年に「国際語」を世に問うたのである。<sup>25)</sup>

このような歴史的背景をもつエスペラントはその誕生から平和、諸民族融和、自由、人間尊重の思想をその内に分かちがたく持っていたといえよう。1913年にザメンホフはさらに彼の考えを「ホマラニスモに関する宣言」という形で公表した。<sup>26)</sup>それは例えば次のようである。

- 1) 私は人間である。そして全人類を一つの家族としてみなす。人類が互いに敵対するいろいろな人種や民族、宗教団体などに分裂してい

ることは、最大の不幸の一つであり、それは、遅かれ早かれ消滅しなければならず、その消滅をできるだけ促進するのが私の義務と考える。

- 2) 私は、すべての人はただ人間にはかならないと見なし、すべての人をその個人的価値と行為によってのみ評価する。自分とは異なる民族・言語・宗教・社会階層に属しているという理由で、人間を虐待・抑圧するのは、野蛮だと考える。
- 3) 私は、あらゆる国は特定の民族に属せず、その出身・言語・宗教・社会的役割にかかわらず、その国の住民すべてにまったく平等に所属すると認める。国益と特定人種や宗教の利益とを同一視したり、国内のある民族が他の民族を支配し、父祖の土地に対する当然な基本的権利の否認を許すような歴史的権利があるなどと主張するのは、暴力が横行していた野蛮な時代の遺物だと見なす。(以下省略)

すなわち、ホマラニスモとは、純粋な人間性と人種間の絶対的な正義と平等の追求に他ならないと言えよう。かくして、このような精神に支えられて、エスペラントは、マクシム・ゴーリキー、アレクセイ・コンスタンチノヴィッチ・トルストイ、ロマン・ロラン、アナトール・フランス、アンリ・バルビュスなどの理想主義的国際主義者から激励と熱心な支持を得たのである。

そして中国では魯迅が錢玄同に宛てた手紙の中で、「私が Esperanto に賛成する理由は甚だ簡単で、とても口を開いて討論することはできないからです。もし賛成の理由はと聞かれたら、私の考えでは、人類は将来必ず一つの共通の言語を持つべきであると思うからというにすぎません。だから Esperanto に賛成するのです」(1918年11月4日)と書いている。<sup>27)</sup> 魯迅のエスペラントに対する考えは終生変わらなかったようで、死去するまえの、上海世界語者協会機関誌『La Mondo』9-10月号(1936年)によるエスペラントに対する意見のアンケートに答えて、次のように答えている。「私自身、エスペラントを支持していると確信している。私が[エスペラントに]賛成するようになったのはかなり早く、約20年前から

だと思う。理由はいたって簡単である。今思い出すと第一に、それ[エスペラント]によって世界のすべての人びと一特に圧迫されている人びとを団結させることができるからであり、第二に、これは私の専門の仕事からなのだが、[各国]文学の相互紹介に役立つと思うからであり、第三に、私の知っている何人かのエスペランチストはすべて、言うことと思っていることがちがうエゴイストたちにまさっているからである」。<sup>28)</sup>

エスペラントは、紆余曲折を経て<sup>29)</sup>、単なる言語の枠を越えて、エスペラント運動として民族解放思想、反差別思想、平和思想と呼応し、影響し合い、かくして歴史的存在となったのである。長谷川テルが学び、それにのめり込み、それを武器として中国の同志たちと抗日反戦運動を戦い、生涯を捧げたエスペラントとはこのような言語であった。

### 3. 中国へ

しかし世界はこのようなエスペラントの精神が目指すものとは全く逆の方向に進んでいた。エスペラント運動のもっとも盛んなドイツではアドルフ・ヒトラーが政権を掌握し、エスペラントはユダヤ人の言語であるという理由で、一切の活動を禁止した。日本でも1936年12月から1937年5月にかけての官憲による大規模な弾圧で、左翼系のエスペラント運動は息の根を止められた。日本はファシズムと戦争の道をひた走りに進んでいた。すべてが国粹主義(民族的排外主義)と軍国主義(侵略主義)一色に塗りつぶされた。反対するものはすべて排除され、抹殺された。こうして日本は廬溝橋事件を起こし、日中戦争へと突入していったのである。

このような時代にテルはエスペラントを精力的に学び、国家の意図する方向とは正反対の道を歩みだした。しかしそれはまたテルにとってエスペランチストとしての理想を実現すべく歩む道であったとも言える。そして同じ頃、中国人留学生でエスペランチストの劉仁と出会い、やがて親や周囲の反対を押し切って結婚した。この結婚はしかしテルにとっては期するところのある結婚であったように思われる。結婚とは言っても同居はせず、

結婚を宣言したようなものであり、テルは依然として親許に住んでいた。葉籟士は中国行きのために既成事実をつくる必要がテルにはあったのではないかと述べているが、このことから、テルが真に中国へ行きたいという思いを現実化するために結婚した可能性が十分に推察できるのである。逼塞した日本から脱出して、むしろ戦乱渦巻く中国大陸の方がエスペラントの理想、つまり諸民族の友好と正義の確立を実現できると、あるいはすべきであると考えたのではないだろうか。事実テルは、日本にそのまま留まるのと比べて、中国に行った方が、より有意義な仕事ができると信じていたと、中国への途上で述べているのである。

テルは中国のエスペランティストたちの助けで、1937年4月14日横浜を発ち、途中神戸に立ち寄り、先行した夫の待つ上海へ向かい、19日に到着した。テルは祖国日本を離れ中国へ向かう船でその心境をこう語っている。「私たちエスペランティストにとっては、民族は絶対的なものではない。それはただ、言語や習慣や文化や皮膚の色などの相違を意味するだけである。私たちは、お互いを『人類』という一つの大きな家族の兄弟であると考えている。それは理論ではなく、実感なのだ。さらに私たちは外的には同一の言語で結ばれ、同一の感情で結ばれている。私たちもまた、自分の祖国を熱愛している。しかし、その祖国愛は、他民族への愛と尊敬と両立しないような性質のものではない。」<sup>30)</sup>ここには、日本人としての生来の自分と、その自分から脱して、エスペラントの理想に生き他民族との共生に踏み出そうとする新しい自分とのあいだのアンビバレントな感情と、揺れ動く自分を説得しながらそれを乗り越えようとするテルの強い意志が表出している。テルはさらに続けている。「ひと月前は、私の25歳の誕生日であった。もし人生が平均して50年だとすれば、すでにその半ばを終わったのだ。過ぎ去った半生はきわめてありふれたものであったし、これからのきたるべき半生も目新しいなものではあり得まい。私はありふれた女性なのだから。しかし、仮りに日本にとどまった場合よりも、いくらかよけいに、より意義のある仕事を何かやれるだろうと私は信じ、そう感じている。なぜなら私はエスベ

ランチストなのだから。」<sup>31)</sup>

「いまや、私の前には自由な海が横たわっているだけである。海は私を祖国と友だちから引き離す。しかし、海はまた私を新しい生活と新しい友だちへとみちびく。さようなら、私の祖国と友だち。」<sup>32)</sup>ここではエスペランティストとしてのテルの気持ちと覚悟がきわめて率直に語られている。海を渡すことは、いわば古い世界から新しい世界への跳躍であろう。すべてを乗り越えて中国という新しい舞台で自分の役割を果たすべく、中国へと日本を脱出することは、まさしく亡命と言えるであろう。<sup>33)</sup>

しかしテルは50歳まで生きることはなかった。もちろん、この時から10年後にその生を終えるとは夢想もしていなかったことであろう。

#### 4. 中国での活動

上海でテルは共同租界の横丁にある上海世界語者協会にときどきこっそりと顔を出し、日本から持っていったタイプライターで、『*Cinio Hurlas* (中国怒吼)』の刊行を手伝った。6月には、「救国英雄」七君子の釈放を要求する抗日デモに参加している。エスペラント誕生50年を記念して、上海世界語者協会が開いた会合にも参加した。参加者は、お互いの政治的立場や思想的立場を越えて、「エスペラントを使って中国解放のために」というスローガンの下に団結し、記念祭は高揚した雰囲気のうち終わった。また上海では、かねて文通をしていた葉籟士と張企程の二人のエスペランティスト、そして東京時代の同志黄一環に会っている。7月28日に日本軍は華北で総攻撃を開始し、8月13日には海軍陸戦隊が上海で攻撃を加えた。

テルは『愛と憎しみ』(1937年)のなかで、その時の様子にふれてこう書いている。「『すべてこのようなことをするのは誰だ。』『日本人か。』『違います。』私は直ぐに頭を振り、全身の憎しみを露わにして答える。『日本軍国主義者です』」。<sup>34)</sup>そしてさらに「エスペランティストとして、国際的文化愛好者として、私は中国文明を略奪者の毒牙から守りたい。女性として、人間として、私は本能的に平和を渴望します。しかしいま、もし可能ならば、私は中国の軍隊に是非とも入りたいのです。

なぜなら、その軍隊は民族の解放のために戦っているからであり、日本人民に対してではなく、日本帝国主義者達に対して戦っているからで、さらに中国の勝利はまさに東洋の明るい未来を運命づけるものだからなのです。」<sup>35)</sup>と、かなり高い調子で続けている。

それから程なくテルは、日本のエスペランチストたちに宛てて『中国の勝利は全アジアの明日の鍵である』(1937年)という公開状を『Cinio Hurlas (中国怒吼)』誌上に発表した。彼女はこの手紙の中で、「幸いにも」自分はエスペランチストであり、そのお陰で、中国語が十分に出来ないにもかかわらず、日本帝国主義への革命闘争の中に小さなポストを得た喜びを書いている。そしてエスペラントを国際的武器に有効に利用すべきだと述べ、かりに誰かが自分を売国奴と呼ぼうとも、闘い続ける覚悟を披瀝している。「日中の国民の間には基本的な非友好関係は存在しません。歴史のページを紐解いてみましょう。逆に、親密な関係があらゆる面で見いだされるのがわかります」<sup>36)</sup>というのが彼女の基本的な立場であり、日本のエスペラントの同志に向けて、「同志の皆さん、この戦争に於ける中国の勝利はたんに中国国民の解放を意味するのみならず、日本人民をもふくめて極東のすべての被圧迫人民の解放をも意味します。それはまさしく全アジアの、全人類の明日への鍵です。同志の皆さん、あなた達はどのようにして、今も動揺しておられるのですか。記憶していて下さい。いまのこの時にさえ、なにもしないとすることは言い訳のきかない罪を犯したことになるのです」<sup>37)</sup>と訴えている。

この公開状にこめられている彼女の行動の重みは、どんなに強調してもしすぎることはない、高杉一郎は述べ、「日本の歴史で、彼女より以前にこのような例があったであろうか」<sup>38)</sup>と指摘している。そして中国の詩人田間(童天鑑)はその呼びかけに答えるように、長谷川テルの行為を讃えて、『V・Mに』(1938年)という詩を書いている。<sup>39)</sup>

同志V・Mよ!

アジアの運命を  
ファシストの地獄から 解放しよう  
あなたの故郷で  
あなたの祖国で  
あなたは聞かないか  
日本と その人民が  
自殺しようとする さげびを?  
だが、V・Mよ  
あなたは悲劇のなかに立ちつくし  
嘆いてはならない  
兄弟たちを  
みちびかねばならぬのだ

たて

闘うのだ.....

—アジアの運命を

ファシストの地獄から解放しよう.....

同志V・Mよ!

1938

しかし上海ももはや安全地帯ではなくなった。そのためテルと劉仁夫妻は危険を逃れて、まず香港へ向かい、そこから広州へ行った。広州では東京時代の同志丁克や他の数人のエスペランチストと、エスペラントによる対外宣伝事業を行おうと運動し、ついに広東省政府宣伝部の管轄下に広東国際協会を発足させた。テルもこのエスペラント部で働いたが、日本人であるという理由で国外追放され香港へ移った。しかしテルは抗日戦争に公然と参加したいと言う目的と希望を胸に、ここでの一年以上の身を隠す辛い放浪の時期を乗り越え、先輩や友人たちの援助と奔走のおかげで、ついに武漢の地を踏んだ。それにはおそらく郭沫若の工作があったと思われる。<sup>40)</sup>しかしテルは郭沫若を長として、胡愈之、葉籟士、葉君健など多くのエスペランチストがいた第三庁には配属されず、国民党中央宣伝部国際宣伝処の対日科で働くことになった。そしてこの所属は後のテルの生活に大きな影を落とすことになる。しかし、ようやく抵抗組織の中にポストを与えられたテルは、そ

んなことを考える暇もなく、喜んで仕事に専念した。葉籟士は、「緑川自身は『私は戦争第一周年の前夜に中国の抗戦に公然と参加することを許されて、どんなにうれしく、希望にあふれていたとか!』と言い」、<sup>41)</sup>テルが武漢に到着してほどなく、マイクの前に立って対敵放送を行ったと述べている。

テルは放送をとおして、日本の人々、日本軍将兵に対する抗日反戦の呼びかけを行った。そして特に戦場の日本の将兵に少なからず動揺を与えたようである。テルの「対敵放送は成功を収めた... 武漢陥落後、敵はこの流暢な日本語の『怪放送』のアナウンサーが長谷川照子であることを調べ上げた。」<sup>42)</sup>そのため彼女は日本の新聞から「嬌声売国奴」と非難された。例えば、1938年11月1日の『都新聞』はテルの写真入りで次のように伝えている。「“嬌声売国奴”の正体はこれ 流暢な日本語を操り 怪放送・祖国へ毒づく“赤”くずれ長谷川照子..... この祖国日本に弓を引く覆面の売国奴女性の正体が武漢陥落と共に判明,... この女性は... 長谷川幸之助(58)の次女、奈良女高師中退の長谷川照子(27)で、かつて“赤”の“女闘士”として暗躍中に中国留学生と“赤い恋”に結ばれて渡支したものである。本年2月上旬突然香港放送局から女の声で反戦演説が行われた... ついで広東に現れて何回となく放送はくりかえされたのだ。今夏わが無敵皇軍が漢口攻略の火蓋を一斉に切るや、今度はこの怪放送が漢口を舞台として毎夕行われ、日本軍部のヒボウ、日本経済に関するデマが紅い唇に乗せて毒づきはじめた... 27日午後5時30分!... この怪放送はハタと止まってしまったが、間もなく覆面の女性長谷川照子の全貌が明るみにさらされるに至ったのだ。」<sup>43)</sup>かくして彼女とその家族に向けられた非難は厳しく、また父親には「引責自害せよ」という手紙がいくつも投げ込まれたという。

しかし、中国の友人たちは彼女を「平和の鳩」と呼び、エスペラントを通じて中国人たちとの真の友愛と連帯をかちとることができた珍重すべき日本人として、心の中に大事にしまい込んだ。当時中国で活動していた朝鮮人エスペランチスト安偶生(Elpin. 安重根の甥)は『平和の鳩 中国の

放送局で日本語の放送をしている日本の女性エスペランチスト ヴェルダ・マーヨにささぐ』(1939年)という詩を書いて、彼女を讃えている。<sup>44)</sup>

### 平和の鳩

戦争で気が狂ってしまっている東洋で  
平和なあなたは、狼や蛇を前にした羊のように、  
もがきながら、しかし勇敢に、すべてを読み取っている。  
あなたの心の深くには正しく設計図があり、  
そしてそのようにあなたは祖国を去り、  
両親や、すべての人を捨ててきた、まるで空の果てへと飛んで行くかのように、  
いつも人類にふさわしい、平和な生活を  
あなたはいつか彼らに与えるであろうと、かたく信じて。

いまメガフォンの前であなたは  
あなたの同胞に真実を告げている—あなたは  
予言している。  
あなたの声は、おだやかではあるが、すでに  
雷鳴を呼び起こすには十分であることを。そして  
箴言をあなたは贈る  
良心が健全のままである人びとに。  
あなたの声がむだになることはありえない、  
それはきっと、苦痛を生み出した、  
血に酔った心をずたずたに引き裂くであろうから。

さて、いったいなにを私たちはあなたに望めるのだろうか、友よ。  
あなたは、海を越えた国からの平和の鳩だ！  
そうだ、あなたはただ籠から逃げて来ただけ  
ではなく、  
青春の熱い渴望のために、  
無気力な人間のように、留まってはいらなかった  
桜の国に疲れはて荒廃した人々とともに。  
ああ、マーヨよ秋の取り入れのために元気い  
っぱい緑一色になれ

いま恐ろしく灰色で、太陽のない野の上で。

武漢でのテルの活動は、しかし3ヶ月だけであった。テルが「とても短かったが、しかしこの時期はどんなにか興奮し、生き生きし、そして張り切ったことでしょう！」<sup>45)</sup>という武漢を10月半ば頃離れ、桂林を経て重慶に入った。10月26日武漢は陥落した。そしてテルの身元が割れた。テルはこの重慶の地で1938年から1945年までの7年間を過ごした。

戈宝権は、1941年7月27日、「郭先生帰国、抗戦参加四周年記念大会」の席上テルが敬愛する周恩来に会ったときの様子を次のように伝えている。「周同志はほほえみながら、『日本帝国主義者はあなたを嬌声の売国奴と言っていますが、実際は、あなたこそが日本人民の忠実な娘であり、真の愛国者です』と緑川に語った。緑川はそれを聞いて、非常に感動し、『この言葉はわたしにとって最大の激励です。また、わたしの取るに足りない仕事にとっての最高の報酬です。わたしは中日両国人民の忠実な娘になりたいと思います』と語った」<sup>46)</sup> 周恩来の言葉はたしかにテルにとって限り無い励ましとなったことであろう。テルと劉仁はおそらく1941年10月頃、国民党中央宣伝部対日科に居られなくなり、郭沫若の対敵文化工作委員会へ移った。テルは相変わらず黙々と仕事を続けたが、しかし次第に圧迫と制限が多くなり、テルの活動範囲も狭くなり、夫妻は1944年の秋に東北民衆抗日救亡総会へ移り、雑誌『反攻』の編集をしたという。またこの間テルは少なからぬ文章を周恩来の指導する『新華日報』や延安の『解放日報』に発表している。<sup>47)</sup>

#### おわりに

抗日戦争勝利後、周恩来の指示で、テルと劉仁夫妻は子供たちを連れ、東北民衆抗日救亡総会の同志と共に東北解放区に入り活動を始めた。哈爾濱（ハルピン）でテルと劉仁夫妻は熱烈な歓迎を受け、まるで凱旋兵士のようなであったという。二人はそこで東北解放区行政委員会編集審査委員を担当し、その後、当時の中国共産党の重要な後方であった佳木斯（チャムス）に移動した。そして

そこでテルは中絶手術を受け、その際の感染で思いもかけずに1947年1月10日死去した。夫の劉仁もその後を追うように同年4月22日肺水腫のため死亡した。長男劉星（1941年生まれ）、長女劉曉蘭（1946年生まれ）の二人の子供が後に遺された。日本では、テルが誰よりも心に掛けていた母が、戦争中の世間の白眼視と迫害の中で、1943年に亡くなっていた。

劉仁は『平凡な思い出』（1941年）の中で、テルの同志として、また夫としてテルの作品『暴風雨からのささやき』（1941年）の刊行を率直に喜び、「これは平凡な女性の、平凡な生活の思い出であるが、それでも、この時代の縮図を映し出していると、私は断言します。作者は、若いエスペランチストで、自分の祖国の軍国主義者たちによって中国で殺りく、放火、狂気に満ちた爆撃が行われるのを自らの目で見ながら、心の中で煮えたぎる正義の呼び声が沸き上がってくるのを押さえきれないのです。」<sup>48)</sup>と述べている。しかしテルの平凡な女性としての平凡な行為は大きな意義を持ち、それ故今日でも人々に深い感銘を与えるのである。

彼女の生涯は僅か35年であまりにも短く、もう少し命を長らえられれば、貴重な証言が残され、エスペランチストとしてさらに貢献できたと思われる。しかし戦火の中国のなかで、エスペランチストとしての国際主義と人類主義を断固守り抜き、不幸な日中関係の最中に両国人民の友好に献身し、反戦のためにその生涯を貫き通したことは賞賛に値しよう。

大島義夫が指摘するように、テルを「はげしい行動に駆りたてるのに決定的に力をもったのは、エスペラントに触れることによってつちかわれた創始者ザメンホフの人類愛的思想への深い傾倒であったことは」<sup>49)</sup> 疑問の余地がないであろう。日本では、二葉亭四迷が教本を著し、大杉栄が関わり、新渡戸稲造が世界の公教育に採り入れようと国際連盟で提案し、宮沢賢治が理想社会の言葉として習い、新しい表現手段として考えていたエスペラントをテルはまったく異なった次元へと持ち込み、いわば戦闘の武器として用いるという新たな局面を切り開いたのである。そしてまさにその



ために、あえて亡命したとも言える中国の地で、<sup>50)</sup>生涯をかけたのである。

郭沫若はテルのために次のような一首の詩を書いて与えた。「はてしない四方は暗黒にとざされているが 天空には星の群が輝いている 雪をうつすには余りにも遠く弱い光だが 喜ばしいことには書物を照らす一点の火がある」。<sup>51)</sup>この一点の火はおそらく長谷川テルのことなのかもしれない。そしてこれをもって彼女の波乱に満ちた生涯は余すところ無く表現されていると言えよう。

### 注

- 1) 水谷尚子「日中秘話 生きていた『延安ローズ』」, 中央公論 1999年9月号, 194-207頁, および(後編)1999年10月号, 242-254頁。
- 2) 韓瑞穂「異境 私が生き抜いた中国」, 伊藤正監修, 2000年。
- 3) 長谷川テルについては伝記, 作品集など少なからず出版されているが, 小論では以下のものを使用した。
  1. 宮本政男編「反戦エスペランチスト 長谷川テル作品集」, 亜紀書房, 1979年。
  2. Verkoj de Verda Majo. Ĉina Esperanto-Eldonejo, 1982.
  3. 龔佩康編「緑の五月 みどりの五月 緑川英子記念」, 友常一雄訳, 中国旅遊出版社, 1983年。
  4. 利根光一「テルの生涯」, 要文社, 1969年。
  5. 高杉一郎「中国の緑の星 長谷川テル 反戦の生涯」, 朝日新聞社, 1980年。
- 4) マージョリー・ボウルトン「エスペラントの創始者ザメンホフ」, 水野義明訳, 新泉社, 1993年, 139-142頁。
- 5) 利根光一, 前掲書, 259頁。
- 6) 龔佩康編, 前掲書, 12頁。
- 7) 前掲書, 11頁。
- 8) 宮本政男編, 前掲書, 295-298頁。
- 9) 前掲書, 290-294頁。
- 10) 龔佩康, 前掲書, 10頁。
- 11) 宮本政男, 前掲書, 6-7頁。
- 12) 1932年9月10日(あるいは11日)。
- 13) 宮本政男, 前掲書, 7頁。
- 14) 大島義夫・宮本正男「反体制エスペラント運動史」, 1974年, 264-265頁。
- 15) Verkoj de Verda Majo, p.194-197. 参照。
- 16) エスペラントの創設者ザメンホフについては多くの出版物が刊行されているが, 小論では以下のものを使用した。
  1. Edmond Privat: VIVO DE ZAMENHOHF, kvina eldono, The Esperanto Publishing Co. Ltd., 1967.
  2. N.Z.Maimon: LA KAŜITA VIVO DE ZAMENHOHF, Japana Esperanto-Instituto, 1978.
3. 朝比賀昇「世界をひとつの言葉で ザメンホフ伝」, 四版, 国土社, 1982年。
4. マージョリー・ボウルトン, 前掲書。
- 17) Humphrey Tonkin (ed.): Esperanto, Interlinguistics, and Planned Language, University Press of America, 1997, p.93.
- 18) Pierre Janton: ESPERANTO. Language, Literature, and Community, edited by Humphrey Tonkin, translated by Humphrey Tonkin, Jane Edwards and Karen Johnson-Weiner, State University of New York Press, 1993, P.2.
- 19) ibid. p.4.
- 20) 高杉一郎, 前掲書, 19頁, 引用。
- 21) 前掲書, 19頁。
- 22) Pierre Janton, p.37-40.
- 23) 高杉一郎, 前掲書, 19頁。
- 24) Pierre Janton, p.23-24.
- 25) ibid. p.25.
- 26) L.L.ザメンホフ「国際共通語の思想」, 水野義明編・訳, 1997年, 95-105頁。以下本書に基づく。
- 27) 「魯迅選集」第十三巻, 改訂版, 岩波書店, 1964年, 93頁。
- 28) ウルリッヒ・リンズ「危険な言語 — 迫害のなかのエスペランチスト —」, 栗栖継訳, 岩波書店, 1975年, 87-88頁。本書はエスペラントによる[LA DANGERA LINGVO. Esperanto en la uragano de persekutoj]の翻訳である。
- 29) Ulrich Lins: Die Gefährliche Sprache. Die Verfolgung der Esperantisten unter Hitler und Stalin, Bleicher Verlag, 1988. この本は, 上記(注28)と同じタイトルであるが, 一部の重複部分を除いて, まったく新しいものである。とくにヒトラーやスターリンの下でエスペラントがいかにか迫害されたかを詳細に追求した優れたもので, エスペラントの紆余曲折が政治的, 社会的, 文化的に良く把握できる。ただ, 副題が示しているように本来の課題ではないにせよ, 上記の本にあったような日本についての記述を欠いているのが惜しまれる。
- 30) 宮本政男, 前掲書, 22頁。
- 31) 前掲書, 23頁。
- 32) 前掲書, 24頁。
- 33) 亡命は, 生国あるいは居住国において何らかの迫害を受けたり, 困難に直面したためそこを去り, 他の国へ脱出することである。主として政治的, 経済的, 社会的理由が亡命の動機として挙げられる。
- 34) Verkoj de Verda Majo, p.374. この著作からの引用は以下筆者が訳した。
- 35) 前掲書, p.376.
- 36) 前掲書, p.379.
- 37) 前掲書, p.379-380.

- 38) 高杉一郎, 前掲書, 87 頁。
- 39) 宮本政男, 前掲書, 279-280 頁。
- 40) 龔佩康, 前掲書, 19 頁。
- 41) 前掲書, 20 頁。
- 42) 前掲書, 20-21 頁。
- 43) 大島義夫・宮本正男, 前掲書, 276-278 頁から引用。
- 44) Elpin: Paca Kolombo, en'Oriente Kuriero', n-ro 1, 1939. なお本文は Verkoj de Verda Majo, p.372-373 から訳出。
- 45) Verkoj de Verda Majo, p.105.
- 46) 龔佩康, 前掲書, 423 頁。
- 47) Verkoj de Verda Majo と宮本政男, 前掲書および龔佩康, 前掲書の各目録, 資料, 年表等を参照。
- 48) Verkoj de Verda Majo, p.367.
- 49) 利根光一, 前掲書, 260 頁。
- 50) ここに, 今後の検討課題ではあるが, 従来の亡命概念とは異なった新しいタイプとしての亡命をみることができるのではないだろうか。
- 51) 龔佩康, 前掲書, 424 頁。なお本書には, 詩の全文の写真が口絵として掲載されている。

# Kolombo de Paco Verda Majo

## — La Antimilita Vivo de Unu Japana Antifaŝista Esperantistino —

NAKAMURA Kohei

Dum la tempo de tiel nomata Milito inter Japanio kaj Ĉinio, kiam Japanio invadis Ĉinion, HASEGAWA Teru estis unu el la aktivuloj, kiuj kontraŭstaris la agresan militon kaj celis pacon inter ambaŭ popoloj. Ŝi estis esperantisto. Sur ŝia idea fono de la porpaca aktivado kuŝas la lingvo Esperanto kaj ĝia pacismo. En la nomo de Verda Majo (Ŝia ĉina nomo estis MIDORIKAWA Eiko.) ŝi partoprenis la rezistan movadon de cinaj esperantistoj kontraŭ Japanio.

Sekvinte ŝian ĉinan edzon Liu Ren (劉仁) al Ĉinio, ŝi forlasis la urbon Jokohamo en la 15a de aprilo 1937, kaj atingis Ŝianhajn en la 19a. Jam en novembro ŝi aprerigis sur la revuon “Ĉinio Hurlas” malfermitan leteron adresitan al la japana esperantistaro. Ĝia titolo estis “La Venko de Ĉinio Estas Ŝlosilo de la Morgaŭo de la Tuta Azio”.

En tiu ĉi letero ŝi skribis, ke ŝi povas preni parton en la revolucia batalo kontraŭ japana imperiismo, dank’ al tio, ke ŝi “feliĉe” esperantistas, kvankam ŝi ne bone parolas la ĉinan. Ŝi akcentis, ke oni utiligu Esperanton kiel internacian ilon por batali kontraŭ imperiismo, kaj deklaris, ke ŝi neniam cedos, se iu insultos ŝin kiel naci-perfidulon.

Ŝia baza starpunkto estis: “Inter la ĉina kaj japana nacioj ekzistas nenia malamikeco fundamenta. Foliumu la historion, oni male trovos intiman rilaton en ĉiuj flankoj.” Ŝi diris al la japanaj esperantistoj: “Kameradoj, la venko de Ĉinio en tiu ĉi milito signifas ne nur liberigon de la ĉina nacio, sed ankaŭ tiun de ĉiuj subpremataj popoloj en la Ekstrema Oriento inkluzive la japanan. Tio certe estas ŝlosilo de la morgaŭo de tuta Azio.” Ŝi daŭrigis kaj apelis: “Kameradoj, kiel vi povus ŝanceliĝi nun? Memoru: en ĉi momento eĉ senfarado signifas nepardonblan kulpon. Kvazaŭ responde al tiu ĉi alvoko, ĉina poeto Tian Jian (田間. 本名: Tong Tianjian 童天鑑) vesis en la ĉina lingvo poemon titolitan “Al V · M”, honore al la deklaro de Hasegawa Teru.

Teru vokis brodkaste al japanaj popolanoj kaj armeanoj, kaj donis ne malgrandan skuiĝon precipe al oficiloj kaj soldatoj. Pro tio japanaj ĵurnaloj akuzis ŝin kiel “virin-voĉan naci-perfidulon”. Ekzemple, en la de novembro 1938, la ĵurnalo Miyako Shimbun diris: “La virin-voĉa perfidulo, kiu brodkaste blasfermas al nia patarujo en flua japanlingvo, estas komunisto Hasegawa Teru..... Malkovriĝis la vera nomo de la anonima perfidulino, okaze de la kapitulaco de la urbo Vuhano. Ŝi estas la dua filino de Hasegawa Konosuke, 58 jaraĝa, kaj ŝi estas Hasegawa Teru, 27 jaraĝa, stud-rompintino de la Virina Supera Pedagogia Lernejo de Nara. Ŝi subtere agadis kiel “ruĝa aktivulino”; falis en “ruĝan amon” kun ĉina studento en Japanio, kaj edziĝis al li kaj ekloĝis en Ĉinio. En februaro de la kuranta jaro oni subite elsendis virin-voĉan diskurson el la radiostacio en Honkongo..... Poste multajn fojojn ripetiĝis la elsendo en la urbo Kantono. Ĝi transiris kaj ripetiĝis ĉiuvespere en la urbo Vuhano, kiam nia brava imperiestra armeo amase komencis atakon al la urbo Vuhano en tiu ĉi somero. Per ŝia ruĝa makulita buŝo ŝi kracis kalumnion kaj mensogon pri nia armeo kaj ekonomia stato..... La elsendo subite ĉesis je la 30 minutoj post la 5a, en la 27a tago, sed la tuta figuro de la anonima perfidulino malkovriĝis antaŭ ni”. Post tio furiozis insulto al ŝi kaj ŝiaj familianoj. Al la patro oni ĵetis leteron, kiu trudis al li sinmortigon.

Sed ŝiaj ĉinaj geomikoj noruis ŝin “paca kolombo”, kaj profunde memoris ŝin kiel raran japanon, kiu

povis akiri veran amikecon kaj solidarecon de ĉinoj pere de Esperanto. Elpin, nevo de An Chung Geun (安重根) kaj korea esperantisto, aktivanta en Ĉinio tiutempe, honorigis ŝin per poemo, kies titolo kaj subtitolo estis: “Paca Kolombo, dediĉita al Verda Majo, japana esperantisino, dissendanta japanlingve ĉe ĉina radiostacio”.

Estas bedaŭrinde, ke ŝi vivis nur 35-jarojn. Se ŝi povus vivi pli longe, restus pli da historie valoraj atestoj, kaj ŝi povus fari pli da kontribuo kiel esperantisto. Tamen ŝi meritas laŭdon, ĉar dum la tuta vivo ŝi staris firme kaj senŝancele sur internaciismo, homaranismo kaj kontraŭmilitalismo.

Guo Moruo (郭沫若) faris poemon por ŝi: “Regas mallumo senfine ĉiujn direktojn. Tamen en la ĉielo brilas aroj da steloj. La lumo tro malfortas kaj ne reflektas sur la neĝo, sed je mia ĝojo troviĝas unu punkto da fajro, kiu lumas librojn.” Ne estas certe tamen probable tiu ĉi “punkto da fajro” signifas Hasegawa Teru.

キー・ワード 長谷川テル, 反戦エスペラント, 中国  
HASEGAWA Teru, Antimilita Esperanto, Ĉinio